
おしえて。 ~ Case:Winter

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おしえて。〜Case:Winter

【Nコード】

N6903F

【作者名】

MMR

【あらすじ】

xxを、おしえて。想いや考えが人それぞれなように、相手におしえて欲しいことも違うもの。そんな気持ちを女性視点にて、超短編の一話読切連載（一話あたり2000弱〜3500字ほど）で、全11編お届けします。

Teach・1 キスを、おしえて。

私には、まだ付き合いたてのカレシがいる。

「あのっ…私とこれからいつぱい、一緒にいてください！」

ほおをなでる風がちよっぴり冷たいキャンパスの秋空の下、精一杯にぶつけた想い。

今思うと、変なコクハクだったけど。

カレは私の言葉を聞いて、にこりと笑って「いいよ」と言ってくれた。

「今日はどこに行こうか。どうする？」

今日も私に、カレはあの時と同じほえみをくれる。

あれから1ヶ月、これまではただの知り合いだった私たちは、休みになればお互いに行きたいところを言い合ってデートをするようになった。

いつの間にかその行きたいところはカレと私が交互に考えるようになっていて、今回は私の番。

暗黙のルール、って感じなのかな？それも、気持ちが通じ合っているようで嬉しかった。

「えっと…まずは服見に行くでしょ、あ、あとお弁当持ってきたんだよ、一緒に食べよ。その後公園に行って散歩しよ」

お互いにお金はあまりないから、結局行きたいところといっても大して変わらなかったり。

そんな、いつもどおりの2人の時間。

だけど今日は、何かが違っているような…そんな気がした。

「ん…わかった、そうしようか」

その原因はすぐにわかった。カレの視線が私を向いていないような、どこか遠くに気持ちを置いてきているような、とにかく普段とは違った表情をしている。

「どうしたの？なんか様子が変…」

「えーいや、そんなことないよ、いつも通りだよいつも通り」

「そうかなあ、今日、私に向かって話、してくれないよね？」

「そ、そう？気のせいだよ」

カレはそう言いながら、どう考えてもムリヤリに、私に視線を向けてくる。

その向け方があまりにストレートだったので、私の顔が少しずつ熱くなってくるのを感じていたけど、お構いなしにカレは私から視線を外そうとしない。

「だ、だからと言ってじつと見ないの！ほら行くよ！」

耐え切れなくて、矛盾していること言ってるなあと思いつつ、私はカレの前を早足で進む。

いったい、カレは何を考えているの？

そんな、嫌な不安を抱きながら。

「ふー、今日も楽しかったね」

夕日が沈みかける時間の公園のベンチ。

日の落ちるのが早いのか、それとも時間の経つのが早いと思ってるからなのか…今日はデートのはじまりから不安はあったけど、やっぱりカレといえるのは楽しくて。

「そう…だね」

でも、今になって同じ不安がよぎる。

ぼつりとつぶやいたカレの顔を、気付かれない程度に軽く覗き込んでみる。

秋の夕日が斜めに入って、影を落としている。その表情に切なさを感じた。

私の思っ、嫌な予感。それは、私を好きではなくなってしまったかもということ。

一度そう考えてしまうと、カレの行動、様子、表情…全てに説明がついてしまう気がして、だから怖くて、あまり考えないようにし

ていた。

だけどそのことを意識しすぎて他の話が浮かばない私は、覚悟を決めて切り出した。

「やっぱりちよつと変だよ、今日。何か…あつたの？」

最後まで言い切る時に、少し言葉がよんだ。

少しだけ起こった沈黙が心を締め付ける。夜に向かっていくこの時間は確かに寒いけど、それ以上に体が急激に冷たくなっていく。

私がなんとか話をつなぐと、何も考えていないのに口を開こうとした時だった。

「聞いてもらいたいことがある」

それまでベンチに座ってから前だけしか見ていなかったカレが、私の方に向かう。

今までに見たことのない、真剣そのものといった表情が感じ取れた。

たぶん…うん絶対、これは大事な話。

嫌な予感を1日中ずっと感じてきた私。だけでもう逃げられなくて、そのまま受け止めるしかなかった。

「な、なに？」

「今まで、何回か一緒に出かけるようになって思ってたんだけど…」

「うん、楽しいよ私」

聞いてもないことを答える私。少しでもひき止めようと思って「そう、自分も楽しいと思ってる。だから」

「だか…ら？」

カレがよりいっそうに私の目を見てくる。まるで吸い込まれそうなくらいに。

あ、来る…私は、その続きを覚悟して待った。

「付き合って、欲しいんだ」

「…え？」

それは予測してなかった言葉。

頭が考えることを受け付けなくなる。言っている意味がよく分か

らなかった。

ただ、普通に聞いてこれは私に対するコクハクにしか思えなかった。

「ど、どうということ？だって、私は既にもう想いを伝えてるはずだけど……」

「……え？」

今度は、カレの方が予測してなかったといった感じで聞き直してくる。

「だって、あの時……」

私が想いを伝えた1ヶ月前のことを、カレに話す。すると。

「あ、あれが告白だってこと？てっきり、一緒にいて欲しいって友達になることかと」

あまりにかけ離れていた私とカレの気持ちに、気が抜けてしまう。自分でも変な想いの伝え方だったとは思っていたけど、まさか、その意味を間違えられていたなんて……

「これまでの1ヶ月はなんだったと思ってるの？」

おまけに、いらない嫌な心配までしてしまったのに。

「ご、ごめん……」

「責任、取ってもらうからね」

「え……何をするつもり……」

「こう、するの!」

その時のカレのびっくりした顔は、きつとずっと忘れない。

びっくりするのも当然だよ。だって、カレに唇を寄せたのだから。今度こそ、間違えられないように。友達だなんて言わせないように。

そんな確認のようなキス。それくらいはさせてよね。

でも、これじゃまだ一方的。

だから、今度は私に。

キスを、おしえて。

Teach・2　ぬくもりを、おしえて。

「うー、さむーい…」

お布団のぬくもりが、すごく心地良い。

突然寒くなったなあ、と起きているのか寝ているのか分からないようなまどろみの中でうつすらと考えたりする。

「でも、時間だもんなあ…」

起きる時のいつものわたしのヒトリゴト。声に出さないと、起きられないから。

「んー、眠い…」

12月になって寒い日が続くけど、それを超えるくらい眠気が強くて。

やっぱり、朝のまどろみが少し足りなかったみたい。

「ボケボケしてんな、相変わらず」

そんな頭がはつきりしていないわたしの耳に、イヤミな声を通った。

そこにいたのは、なぜか小学生の時から高校生の今までずっと付き合いのある、幼なじみというより悪友のような存在のアイツ。

わたしの弱いところをとことん突いてきて、わたしを困らせる嫌なヤツ。

「仕方ないでしょ、冬で寒いから起きられないんだもん」

「なに言ってるんだ…夏は暑さでボケボケしてるくせに」

「うっ…いいじゃない、女の子らしくてカワイイでしょ？」

アイツは何も言わないでわたしを見てきたかと思うと、首を振りながらわざとらしくため息としか感じられない息の吐き方をしつつ、足を進める。

「な、何か言いなさいよ！」

言っただわたしの方が恥ずかしい。

きつとこういう風に女の子の扱い方を心得てないから、彼女の一つもできないんだよ。

わたしがそう心の中でつぶやいた…つもりが、少し声に出てしまったらしく。

「…何か余計なこと言わなかったか？」

「別に」。朝からわたしが構ってあげているくらいだから、よっぽど相手する人がいないんだなーって」

「何バカなこと言ってるんだか…ほら、行くぞ」

涼しい顔して、よく言うよ。

そんな冷静な対処をされると余裕を見せられているようで嫌な感じ。

そう言いながらも、置いていかれそうになるので駆け足でついていくわたし。

結局わたしがどう思おうが、いつも何をするにも、アイツ主導になっちゃってしまう。

少し考えればついていく必要はないはずなのに、流されるように行ってしまう。

そんなわたし自身の行動も、よくわからなかった。

「バカなことって何よ、彼女くらい作ったらどうなの？」

アイツのちよつと後ろを、追いかけるようについていくわたし。

あまりにもわたしが置いていかれて、打ち負かされているままで終わりがなくなかったので、せめて口だけでも追いついてみる。

「そんなに彼女を作って欲しいと思ってるのか？」

「当たり前じゃないの、毎日楽しくなるでしょ？わたしがつるんであげなきゃいけない時間も減るし」

「…じゃあ、どうすればいいのかおしえてくれよ」

アイツの歩く足が突然止まったので、後ろを歩いていたわたしはその背中にぶつかった。

と思ったのが一瞬。だけど、違っていることにすぐ気付いた。

「何で急に振り向いて止まるの、鼻ぶつけた…」

背中だと思っていたわたしは、それだけ言うのに精一杯だった。突然のこととはいえ胸に飛び込む形になったなんて、ごまかしたくて。

アイツの背丈は改めて見ると、当たり前だけどわたしが見上げなければならぬくらいに大きい。

それを意識してしまうと、すごく不覚なことだけど、わたしの顔が勝手に熱くなっていく。

「彼女なんていたことないからな。どうせなら練習に付き合ってくれよ」

「何勝手なこと言ってるのよ！わたしの気持ちを考えないで言うてるの？」

「…じゃあ、こっちの気持ちも考えて欲しいもんだ」

わたしが何も言えなくなったことをいいことに…

包み込まれるように、わたしの体が簡単にアイツの胸におさまってしまう。

ずるいよ。これじゃ、わたしが手のひらで遊ばれてるみたい。

なんでホント、わたしの弱いところをいつもいつも突いてくるの？

どうしていつも、コイツに主導権を握られなきゃいけないの？

でも、この暖かさはいつまでも感じていたい…と思ってしまう。

それは、朝のまどろみの続きをしているよう。

だから、このままこうしてて。そしてお布団の中なんか超えるくらいいい。

あなたのぬくもりを、おしえて。

Teach・3 恋のテクニクを、おしえて。

私の恋のテクニク。

男と目が合ったらちよつとだけ気付いたふりをした後、慌てるふりしてそらすのはあたりまえ。

いつも口元は上げて、にこにこしていること。

もちろん、鏡を見てその練習だつてする。

それだけではなく、他にもイロイロ。そんな私の努力はいつしか周りの女の子たちにも知れ渡つて、時にはどうすれば振り向いてくれるのか、そのコツを聞かれたりもする。

私とそのテクニクを普段から使っていることで、男たちは私に告白をしてくるようになっていたのだけど…私は全て断っていた。

だから女の子の間とは打って変わつて、男たちの間では心をもてあそぶ悪魔のような女だというウワサが私本人にも届いていた。

「はあ…こんなつもりじゃなかったんだけどな」

そう。私は別に、もてあそばうなんて思っていなかったのに。

いや、結果的にはそうなつてしまったのかもしれないけど…

「おい、ずいぶん悪いウワサがたつてゐるみたいだぞ…また誰かフツたのか」

私にかかる、その声。

そう、元はといえばコイツがその元凶よ。

「知らない…勝手に仕立て上げてるだけでしょ。ゴシップ好きだもん、みんな」

「そうは言つてもな。毎回ターゲット変えて色目つかつて…いくらなんでも雰囲気で気付くつての」

だけどころして何も私に傾いてくれないと、本当に何をやってるんだかわからなくなつてしまう。

そう、私はこの男が好き。

高校の時から一緒にいてその時から好きだったけれど、ずっと言えないままでいて、一緒の大学を目指すと思った時には、

『大学に入ったら、テクニクをみがいて振り向いてもらうんだ！』
って張り切って、いざ同じ大学に入れたのはいいものの、勉強して実践したテクニクはことごとくこの男には通じなかった。

「何やってんだ、気持ち悪い」

そんなことを言われ続けた。

私は悔しくなって、こうなったら何が何でも意識してもらおうとして、なりふり構わず周りの男に気を持たせるようなことばかりして。

それで結果的には周りにカン違いさせているわけだけど…

でも、そこまでしてもこの男といったら嫉妬してくれるわけでもなく、慌てることもなく、あくまで友達としての付き合いしかしてくれなかった。

だいたい、高校の時に同じ大学を目指して私が宣言してくっついてきているのに、私が好きになっていることを気付いていないの？

…それとも、私に気がないの？

もう本当に、誰かおしえて。

「気がないんだったらそういうのは止めた方がいいぞ。敵を増やすだけだ」

心配より、私のことをちゃんと見て欲しい。

そんなことは、今となっては直接言えなかった。

「じゃああなたはどなのよ。なびかなかったじゃない」

そう、そのターゲットの1人目なのよ。

「バカか、そんなことされてなびくほどオレは軽くない」

「そう…なの…」

私の今までの努力が全て否定されているようにしか聞こえなくて、声あまり張れなくなる。

「ただな、ドキッとはする。おまえがそんなことをするとは思わな

かったからな」

「フオローしなくなつていいわよ…どうせ気持ち悪かつたんでしょ？」

「そりゃまあ、そうだ」

私から質問したとはいえ、はつきり返されるとかなりダメージが大きい。

心臓に針が刺さった気分というのはこういうことを言うんだろうな、と思えた。

「高校の時くらいの何も考えずにオレと一緒にの大学に行く！なんて言つてたおまえが…その、好きだからな」

「えっ…」

雰囲気我突然打つて変わるそれは、あまりにも突然の展開。全身すみずみまでが、鼓動を打つような感覚。体が急激に熱くなる。

私が視線を向けると、彼はそむける。

「ま、何も考えずに目先のテクニクを使いまくるっていうのはおまえらしいわ。どうせやるんだつたらオレだけにしとけ」

「な、何言つてんのよ、それを言うならもつと早く…」

熱い気持ち、目にあふれた。

「悔しい気持ちばかりさせて…もう知らないんだから！」

「はいはい」

冷静に抱きかかえてくるコイツの胸の中はあたたかくて、優しい。なんなの？最後には私のテクニクじゃなくて、コイツのテクニクにはまっけてしまっているの？

そう考えると、余計に悔しくなる。

私は知識におぼれて、私らしさを見失っていた。でも、ありのままの自分を見てくれる人がいる。

そんな人が私の好きな人で良かったと、自信を持って今は答えられる。

でも、やっぱりこのままじゃ終われないから。

あなたに負けないくらい、もっと自分を磨いてやるんだから。
もちろん、それを見せるのはコイツにだけ。
だから、これからはコイツのためだけの。

本当の恋のテクニックを、おしえて。

Teach・4 ドキドキを、おしえて。

「いいお天気だなー」

海をそのままひっくり返したかのようになくもりのない青空の下で、私は1人、噴水の前である人を待っている。

その相手は、ずっと私が想いを寄せてきた人。

どれくらいずっとだったのか、もう忘れてしまったくらいにだけども今、その人を待てるということは、どんなに幸せなことなのだろう。

こうして待っている間でも、既に胸のドキドキがおさえきれなさそうになっている。

自分の心でさえもコントロールできなくなるほどに、どうしてもなくなってしまうっている。

こういう時は、どういうことを考えたらいいんだろう。

少しでも、緊張をおさえなきゃ。

それは、とても急いでいた日。

あまりに寒くて、もう少しだけとふとんをかぶったのがいけなくて、今その分を取り戻さなければいけなくなってしまうて。

学校に遅刻しないための電車の時間ギリギリになっってしまうていた。

本当はもう1本遅い時間でも間に合わないわけではないのだけど、私の歩くスピードではかなり厳しいし、何より時間ちょうどだからか道がすごく混んでしまって、思うように歩けない。

だから、私の間に合う時間は普通の人よりも1本前。それなら駅までの道のりは特に混んでいるということはないから、私がかんばれる場所は家から最寄りの駅までのこの部分しかなかった。

「間に合う、かな……」

左手の手のひらを自分に向け、時計を確認する。

「あ…」

すでに、その電車が出発する時間だった。

いつも乗っている電車もけっこう混んでいるけど、やっぱりギリギリの時間はますます混んでいる。

人の動きに身をまかせないといけないほど。

「おっ、どうした。珍しいな、このタイミングで会うなんて」

私がつり革の下の部分にようやく手をかけるようにして流されなようにバランスをとっていると、横から聞き慣れた声がした。

それは、私とクラスが一緒の人。

「あ、お、おはよ…」

だけどそれ以上の気持ちがある私は、かなり心が揺さぶられた。それはもう、心臓が飛び出てそのまま落ちてしまっくんじやないかってくらいに。

「ま、おおかた寝坊したつてとこだろうな。そうじゃなきゃわざわざ混雑するこの電車に乗るわけないしな、うん。おれはなんともないからこの電車でいいけどな」

勝手に言っただけで納得しているけれど、本当のことだから何も言えない。

ただ、最後の一言に対しては彼も単なる寝坊なんだろうと、頭の上の髪の毛の方で思った。

「…何がおかしいんだよ」

私はそのことを思っただけで笑ってしまったみたいで、私のひたいに指ではじかれる軽い衝撃が走った。

「いったあ…もう、こんな狭いところでやめてよ」

私の特別な想いとは逆に、彼はどうも私のことをおもちゃか何かと勘違いしている感じがある。

私たちは、普通の友達。そんなスタンスでの付き合いだった。

電車を降りて、学校までの通り道。

さつきも思っていた通り、この電車では早く歩かなきゃいけない上に人をすり抜けていかなくちやいけない。

「何やってんだよ、早く行くぞ」

すでに少し先に彼がいる。いつの間に、と思っただけどうも私が遅いみたいだ。

それでも人の流れがうまく読めなくて進めない。すると彼は私のところまで戻ってきたかと思うと、

「まごまごしてんなよ、行くぞ」

そう言っただけ私の腕をつかんで歩き出す。

「え……えっ？」

私は心の整理もつかないままに、引きずられるように、つまずきそうになりながら、彼の後ろ姿をずっと追っていく。

その背中なんだから頼もしくて、大きくて。辺りの雑踏は私の耳には入らず、ひたすら顔も見えないのに見続けていた。

……ドキドキを、おしえて。

私たちは、遅れることなく教室に入ることができた。

「なるほどな、いつもあの電車に乗っていないワケが分かったわ……」
彼は私のとなりで机にべったりと体をくっつけて突っ伏している。

「べつに……連れてって欲しいとか頼んでいないけど……」

「な……たまたま気が向いて親切心で連れてってやったっていうのにそんな言い方あるか」

つかまれている腕をさすってみる。もう腕は離されているというのに、なんだかまだ熱く感じた。

「急に腕をつかんで連れ去ろうとしたり、ひたいをキズモノにしたのが親切心なの？」

「おい……その言い方確実に誤解を生むからやめてくれ」

突っ伏していた体を起こして焦っているように見える彼に、私はさっきの頼もしさとのギャップを感じて、おかしくて仕方なかった。

だから、こんなことも冗談っぽく言えたのかな。

「誤解を解きたかったらこれからも今日と同じ電車で遅刻しないように連れて行ってよね。その分寝坊できるんだから」

考えてみれば、かなり強引なことを言ったと思う。

「本当に待ってるのかよ…」

彼が私の前にやってくる。

そう…私はまだ、彼に何も気持ちを伝えていない。

強引なことをあの時には言ったけど、それはまだはじまりにしか過ぎないわけで。

きっとその時は彼といれば、必ずやってくる。こうして彼と一緒にいる時間が続くかぎり。

だから、その時は。

もっとドキドキを、おしえて。

Teach・5 クリスマスを、おしえて。

街に流れる、毎年おなじみのクリスマスソング。

相変わらず気が早くて1ヶ月も前から流れていたけれど、時間はどんどん追いついて、気がついてみれば今日はクリスマスイブの3日前。

あえてカウントダウンする理由も意味もないけれど、どこか意識してしまうのは、私に彼氏がないからなのかな。

「去年のクリスマスは、楽しかったなー」

ふと、つぶやきながらその時のことを思い出す。男女問わずに誘い合わせた人たちで集まって、話をたくさんして…

その途中で、ある女の子に『恋なんて絶対しないんだからねー』って、恋することを否定するようなことを言われた時に困った覚えがある。

だって、友達が連れてきた人の中に私の好きな人がいたのだから。誰にも、言ったこともなかったのに。

いつも遠目で見ていただけで、声をかけることのできなかった人でもその日から、あの人とは会うと言葉を交わすようになったし、時には話し込むこともあった。その時のメンバー数人で集まって、デート気分を味わったりもした。

…それでも、距離は相変わらずだけど。

なんだか、今までのことを振り返るだけでも顔が熱くなってきた。しまう。

「それにしても…そもそもなんで私、ここを歩いてるかなあ」

人の多いファッション街。またクリスマスにみんなで会うだろうから、服くらい準備しとけば？と去年のクリスマスの時に集まったメンバーの一人に言われて出かけてみたものの、特に欲しいと思うものはないし、カップルだらけで居心地が悪い。

「ま、いいか。少しぶらつこ…」

そうして歩き始めようとした矢先のことだった。

あまりにも偶然？それとも必然？

あの人が、前から歩いてくる。

「あ……」

私が声を漏らすのと同時に、あの人と目が合った。

「偶然だね、ここで会うなんて」

人を通しての付き合いや、会うと分かっている場所……例えば大学のキャンパス内とかだと数え切れないほど会っているけど、街角で心構えもなしに突然会ってしまうと、なんとなく気恥ずかしかった。それが表情に出て相手に嫌な印象だけは与えたくなくて、表面的にだけでも冷静にあいさつしなきゃ。

……というつもりであいさつしたけど、できてるかな。

「そうだな、けっこう久しぶりに会う気がするよ」

どうやら、あまり心配しなくても良さそう。ちょっとほっとした。

「今日はどうしたの？」

「いや、もう3日後がクリスマスだろ？服でも用意した方がいいんじゃないかって言われて」

「そうなんだ。私も同じように言われたの、考えることは同じなんだね」

「そっか。どうせだから一緒にまとめて見て回ろうか」

流れていくような話のペース。だからその言葉に何も考えずに「うん」と答えてしまった。

けれど、その後によく考えなくても分かることが一つあった。

……これって、デートじゃないの？

それからどれだけの時間が経っただろう。

それほどまでに時間を意識しようとする気持ちが向かないほどの短い時間だった。

ただ、こんなにゆっくりと2人だけの時間を過ごしたことは今までになかった。

服を買う以外にも休憩に喫茶店に入ったり、ソフトクリームを買って食べたり。

冬に買うソフトクリームはさすがに冷たかったけど、顔がずっとほてっていたせいか、ちょうどよく冷ましてくれた。

自分でも気持ち悪く感じるくらいに、良い雰囲気になっている気がした。

だけど、日の沈むのもこの時期では早くて…

「そろそろ帰ろうか」

あの人の口からでるその言葉が切なく響いた。

「…うん、そうしょっか」

本当は、もつと一緒にいたいけど。

そんな考えをめぐらせる。こんなに楽しい時間が、簡単に壊れてしまうような気持ちを感じた。

…だから、やっぱり引き止めなきゃ。それにこのまま終わって帰っちゃったら、今度いつチャンスがあるか分からない。

「あのっ…！」

私が言葉を続けようとする。と、同時にさえぎる電子音があった。それは、ケータイのメールの着信音。

そのまま話を言い切ってしまったてもよかったかもしれないけれど、あまりにも間が悪くて仕方なく話をそらした。

「…ごめん、メールが来たみたい」

すると、あの人もケータイを取り出しはじめた。

「オレもだ」

2人で、それぞれメールの内容を見る。

『やつぽー どう、会えた？なかなか行動に出ないから、ちょっと出会えるようにしかけてみたよ。うまくいったかな？』

「ご丁寧にも、そのメールは同時に数人に送る時にそれぞれ誰に送られているのか分からないようにするBCCでやってきたけど。」

少なくとも他の一人の送り先は、同じタイミングでメールを見ている…

「…あいつらにしてやられたか」

吹き出した顔につられて、私もほおがゆるむ。

そうだ、同じ内容のメールが届いたということは。

「同時送信するなんて、会えてたらBCCにしても意味ないのにね」

「まったく。何考えてんだか…」

「返信しようか、会えたって」

私はケータイをカメラモードにして、インカメラをかける。

液晶画面に映る、2人の顔。

その距離が遠すぎて、とぎれていた。

だから私は思い切って。

「えいっ！」

ピースサインをしながら、カレの肩に顔を密着させる。

とまどうカレの顔を画面に見たけど、そのままボタンを押した。

…もう、カレって呼んでもいいんだよね？

そんな意味もこめながら、私はカレの目を見る。

「ん、いいんじゃない？」

カレのやわらかい笑顔が嬉しい。

私もじつと見つめることができることに幸せを感じながら、返事のメールを書いて送信した。

「おどろくかな？」

「予想通りと思ってそうだけだな」

辺りは真っ暗になり、2人きりでいられる束の間の時間。

でも、今日1日の中で一番満たされる時間。

「…じゃあ、続きは3日後にでも」

「え…」

一緒にいたいという私の想いがつつめけているような気がして、恥ずかしい。

でも、それも心地よかった。

いったい、3日後をカレと過ごしたら、どうなるんだろう？

そんな、期待しちゃってもいいくらいの。

ステキなクリスマスを、おしえて。

「…ん？」

私たちの寄り添う写真を送信したメールの返信があった。

『うんうん、1年前のクリスマスの時、気になってそうだから呼んだのは正解だったね』

「ええっ！」

同じタイミングでカレまで驚く。

今のメールを確認すると、またもBCC。

と、いうことは…

「まさか、1年前からしてやられてたのか」
私の様子も見て、カレがつぶやく。
相手の方が一枚上手みたいだった。

Teach・6 恋のはじまりを、おしえて。

お正月の街並み。

確か私が小さかった頃は店なんかやっていなかったはずなのに、今なんてまるで普通の休日…いや、それ以上に大型連休中のようににぎわいを見せている。

親子連れは普通にいるとしても、同じくらいにカップルもちらほら。

「何を正月からイチヤイチヤしてるのかねえ…」

恋だの愛だの言っているのがバカバカしくて仕方がない。恋をすると成長するなんていうのも、信じられない。

ついこの前のクリスマスだって、その更に1年前の同じ日に集まっていたうちの2人がくっついて仲良くデートするなんていうから、集まりに來なかつたりするし。

まったく、どうりで『恋なんて絶対しないんだからねー?』とかなんだ時、反応が薄かつたわけだわ。

あ、一応ことわっておくと、別にモテないからひがんでいるというわけでもない。

告白されたこともあるし、街中で声をかけられたこともある。

…って、誰に言ってるんだか。

「1人でさびしそうだねえ、お兄さんが付き合ってあげましようか?」

私が1人ツツコミみたいなことをしているうちにもこれだ。

「いりませんっ…って、あれっ」

「よう」

そこにいたのは、そのちょっと前のクリスマスの集まりにいた男。1年前の時にもいて、なんとなく気が合っつて友達としての付き合いを続けている人だった。

そんな男が、手をあげて何の悪びれもなくあいさつしてきた。

「なんというベタな登場をしてくるのよ、アンタは」

「正月に1人でカワイイ子が歩いてりゃ、声かけないわけにはいかないよ」

「何調子いいこと言ってるんだか…」

「と、いうわけで。今日は付き合ってくれ」

「何が『というわけで』なんだか…」

ツツコミをする気も起きず、同じような言葉の返し方で対応する。

「このまま帰ったって、お互いヒマなだけだろ？」

「私は私で好きにするから、ついてくるならご勝手に」

関わりと面倒そうだったので突き放したつもりだったのに、どうやら彼は肯定の言葉ととらえたらしい。

「わかった、それでいい。ついていく」

なんてポジティブなモノの考え方をするんだろう、と思いつつ、言ってしまった以上は仕方がないので何も反論できない。

そう、じゃあ勝手にすればいいじゃない。

心の中でつぶやいて、私は何も言わずに歩き出した。

私のちよつと後ろを、彼が歩く。

普通は逆なはずの光景だろう、周囲の好奇な視線を気のせいかもしれないけど感じる。

それとも、彼のことを意識している…？

立ち止まり、振り返って彼の方を見てみる。

「どうした？　ようやく人と話せる気になってくれたか？」

… やっぱり、それも気のせいかもしれない。

「ずいぶんと時間が経つけど、よくまあそこまでヒマしてるわね」

「それ、自分が言えるセリフだと思ってる？」

「そりゃそうだけど。私にかまってるより、もつと有意義な時間の使い方もあるでしょうに」

彼は一瞬黙ったけれど、それは言い負かされたといった感じではなく、大きく息を吸って何かを整えようとしているだけのように見

えた。

「いいや、間違いなく有意義な時間だと断言する」

「簡単に言い切ってくれるのね。どこが有意義なのよ、後ろにくつついてきてるだけじゃないの」

「後ろにくつついてきてるだけ、ね…そうとしか見てないのか」

「それ以外に何かあるはずないでしょ」

「いや、あるぞ」

さっきから話が一向に進まない。理由を言われないと、ずっとループしそうな気がする。

「根拠を言いなさいよ、納得する理由だったら普通に付き合っただけのわ」

「本当だな？」

「変なところで確認するのね…大丈夫よ」

後ろにくつついてきてたのを横に置いてあげるくらいのことだっというのが、そんなに重要なこととは思えないけど。

「じゃあ納得する理由を言っただけ」

「何もつたいぶってんのよ、さっきから。早く言いなさいよ」

「なんというか、だな。お前が1人で歩いてたら男に声をかけられる可能性があるだろ？」

「は？いきなり何の話を…そもそも声かけられてもついていけないわよ」

「多少強引にでも連れてかれるかもしれないぞ」

「話をそらそうとしてもムダよ」

先にクギをさしておかないと本当に無限ループが始まりそうで、それは時間のムダでしかない。

「いや、話はそれでないぞ。誰かに言い寄られる可能性はなるべく少なくしておきたい」

「何を言ってるの？それがなんだって…」

「ずいぶんニブいんだな、誰かに持つてかれるくらいだったら自分が持つてくって、そういう話だ」

「なっ…！」

言葉に詰まった。何かを整えようとしていたのはこのためだったの？

それにしてもワンクッションさえ置かず、表情も変えずに簡単に言われてる気がする。

というか、こんなに回りくどく言われるなんて…

「さあ、納得する理由を言ったろ？これで『付き合って』くれるんだよな？」

「バカあ！『付き合う』の意味カン違いするなっ！」

まったく、多少強引に連れてこうとしてるのはどっちの話なのよ。だけど、彼のペースに既にはまってしまっている私もいる。

きつとこれからも、そういう関係が続くのもかもしれない。

恋をして成長する、なんて今は言えないけれど、でも今思うんとも言えないこの気持ち…胸がふるえるような感覚は、不思議と悪くはない。

こんな気持ちにさせられているということは、たぶん、私は…

だから。

恋のはじまりを、おしえて。

Teach・7 愛する幸せを、おしえて。

わたしとあなたは、もう3年の付き合いになる。

付き合いといっても、友達としてじゃない。お互いに想い合うことができたあの日。

「好きだよ」

あなたがそう言うてくれた日から。

あなたのことはよく知ってる。緊張した時には言葉が少なくなつて、大事なことを言う時は必ずシンプルなものになるの。

でも言葉なんて少しだけでいい。それまでの友達としての付き合いの全てが、この一言に詰め込められているのが伝わった。

だからその時は、わたしもつられて一言だけ。

「うん、私も好き」

たった一言だけ言い合っただけなのに、なんだか照れくさくなつてしまつたりして。

とてもあなたの顔を見ることさえできなくて、うつむいたりしていた。

わたしとあなたの付き合いは3年と言つたけれど、今日はちょうどその想い合うことができた日。

お互いに仕事が忙しくてなかなか会えなかったけど、なんとか都合をつけて夜のデート。

ただあなたと今日会うことになった時に『記念だから』といった言葉は入っていない。あなたの言葉にも入っていない。

忘れているわけではなくて、言わないだけ。わたしたちの暗黙のルールだった。

「寒いね」

港の見える公園の欄干に2人寄り添つて、わたしは息を大きく吐

く。

白い結晶がわたしの視界を覆う。あなたの息と交じり合って、港から輝く光がダイヤモンドが反射するようなきらめきのように見えた。

「ああ」

腰に手を回されたかと思うと、わたしはあなたの体に吸い寄せられるように引つ張られる。

本当は密着している側しかあたたかみは感じないはずなのに、心からあたたまるようで。

「しばらくこうしていたいね」

「そうだな」

あなたの言葉はわたしの返事ばかり。だけど、それがあなたの最大の優しさだと知っているから。

わたしは抵抗することもなくあなたの腕に頭をくつつけた。

そのままわたしもあなたも何も言わずに、ただただ時間が過ぎていくのを感じる。

決してこの時間はムダじゃない。あなたがそばにいただけで心は落ち着くし、疲れも取れていく。

波の音が素敵なBGMに聞こえる。色々なものに包まれて、今のわたしはすごく幸せだと思えた。

「わたしたち、だいぶ長く付き合ってきたね」

思い返すと、たくさんの思い出がある。デートもたくさんしたし、ケンカもしたし。

「浮気の疑いを持たれた時は困ったけどな」

そう、わたしは一度あなたを疑ったことがあったんだっけ。

浮気のこととは結局、ただの友達だった女の子が彼に何をプレゼントすればいいのか相談していただけという、やけにありがちなパターンだったけど。

それでも焦ってしまうほど、あなたのことが好きだったから。

「ごめんね」

「いや」

きつと、あなたの言葉の少なさで損するのはそういうところ。付き合っているわたしでさえも戸惑うようなこと、誤解してしまうことをあなたはしてしまうんだよね。

でも、もうあなたのことはちゃんとわかっているつもり。きつと、これから先も。

ただどちよつと意地悪をしてみた。本当はわたしがそんなこと言うのは間違ってるのに。

「なんか、怒ってるように見える」

「そうか？」

「あの時もちゃんと謝ったのにそんな顔してた」

「どうしてほしいんだ」

「うーん……じゃあなんかひとつ、して欲しいことあったら言って」

「じゃあ」

少しくらい悩むかと思っただら、あなたは何も躊躇せず。

「結婚しよう」

3年前と変わらないあなた。わたしたちには一番大切な言葉まで、シンプルな言葉で片付けてしまう。

というか、今度ばかりは言葉がシンプルというだけで済んでいないよ。なんでこんな突然なの。全然心構えなんてできていないのに。意地悪したつもりが、わたしの方が返り討ちにされてしまった。

あなたにはかなわないな。

ただどこかで文句を言うほど、わたしがあなたのことを理解していないと思っただら大間違いなんだから。わたしはあなたに動揺を見せないように気をつけながら。

「うん、私も結婚したい」

たった一言だけ言い合うわたしたち。あの時と同じ照れくささを感じるけれど、今度はしっかりと向き合う。

ここがゴールなのではなく、むしろスタートだと分かっているから。

今までは恋することの幸せをいっぱい教わった。
だから今度は。

愛する幸せを、おしえて。

Teach・8 よろこびを、おしえて。

「ふああ…眠い…」

私の思う、心の底からつまらないという負のエネルギー。それは私の意識と全く関係なく、大口を開くもとなる。

ここは、大学の講義室の中。だけど、今は講義を受けているわけではない。むしろ休憩時間で、ゆっくりしていていい時間なはずなのだ。

さつきまで講義を受けていた人はほぼ全員、その席にはもういない。だいたいは他の人のところへおしゃべりをしに行ったり、講義室を出て誰かと電話したり…とにかく、何かと人とのコミュニケーションを取りに行っている。

私は、それを批判するつもりはない。それはそれでうまく世渡りしていけばいいと思う。だけど、だからといって私が同じ行動を取るとするのはありえない。

一人が好きなのも去ることながら、人と関わるのが苦痛だった。何かというと流行りに乗ったり、悪口にも似たゴシップ的な噂話だとか…そういうことに関わるのが嫌なのだ。人の作ったものに大勢の人が流されて、一体何がしたいんだろうと思う。

だから私は、いつも一人にいる。話しかけられれば適当に話を合わせるけれど、積極的に私からどうするというのではなく…

「じゃん！」

そんなことを考えていた途中、それは突然のことだった。

真正面のテーブルの向こう側から、男の顔が出てきた。

さすがに驚いた。ほおづえをついてどこを見るわけでもなく考え事をしていたところに、何かが目の前に飛び出してくれば、それこそ私の意識とは関係なく反応してしまう。

「ははは、驚いた驚いた」

腕を組んでテーブルに置き、顔を前に出してきたこの男は、どこ

が見覚えのあるものだった。

「どちらさまだったかしら」

「なっ、オレのこと忘れられてるのか…ちょっとショックだな。高校3年の時一緒のクラスだったっていうのに」

「そうだったかしら」

いつものように適度に話を合わせる。この男が高校で一緒のクラスだったということは分かっていたけれど、あまり関わりたくなかった。あくまで今は、という話なんだけど。

というのも今、この男は女をとつかえひつかえしているという噂がある。

他にも最近では聞かなくなったけれど、色目を遣って告白させてはふっているという、男をもてあそんでいる噂のある女もいたっていう話だし、随分と軽い人がいる大学のようだ。もっとも、この男もそれに流されているだけなのかもしれない。

「まあ、それはともかくだな…いつも暇そうにしているけどいいのか？つまんなさそうな顔して」

「私の自由でしょ、そんなの。私は一人でいたいと思ってるんだけど」

「うん、知ってる」

いとも簡単に言ってくれる。その言葉と正反対の行動をしているということを認めているのだ。

「そっちは暇じゃなさそうだから私なんかに構ってないで違うところ行けば？」

「随分とオレは嫌われてるよーで」

「そんなことはないわ。私は気を遣ってあげてるのよ」

私はこうして一人でいることに慣れている。だから、いきなりこうして話を振られることにも慣れていない。

それに、理由はまだあるんだけど…

「気を遣う、ねえ…何に気を遣ってるのかはだいたい想像がつくが」
「分かってるならその狙ってる人のところに行きなさいよ」

今、私はどんな顔をしているんだろう。ちゃんと普段どおりの顔をして話せているだろうか。とても心配だった。

「しかしおまえも噂好きだったとはな」

でも、その心配以前に聞き捨てならないことをその男は言った。

「噂好きなんて、心外だわ」

「ああ、そうだと思ってたんだけどな。でも現にオレの噂を鵜呑みにしてるだろ？」

確かにその通りだった。私自身でもこれは矛盾していることだと思っている。でも、どうしても意識してしまっ

「さつきはあくまで客観的な意見を言っただけよ」

「じゃあ、噂はウソだと思ってくれてると」

「ウソっていうか…」

「じゃあ信じてるってことなのか？」

いつの間にか、なんだか迫力に押されている気がする。私の言葉に間髪入れずに返してくるからだろうか。だから…

「…信じたくない、って思ってる」

今まで出そうとしていなかった、私の本音がここで出てしまった。

「オレも同意見だ」

そして、私との間に一時の緊張が走った後…

「信じていて欲しくなかった」

そっか…結局、私も同じだったんだ。むしろ振り回されていたのは、私の方。

噂が本当でないと知った今は、素直に気持ちを言える気がする。

でも、それを打ち明けるのはまだ先の話。

噂に負けないくらいの関係を築いてからにしたい。

だからその日が来るまでは、今まで一人でいたぶん…

二人でいられるよろこびを、おしえて。

Teach・9 気持ちを、おしえて。

「あはは、お兄ちゃんはきっと彼女ができることになるんだろぅな
あ」

窓の外でころころと変わり流れていく景色を見ながら、私は思った言葉を口に出していた。

ほんの少しだったけど、様子を見に来てよかった。そんなことを思いながら。

お兄ちゃんとは離れて暮らすようになってから3年近くになる。お父さんの転勤が決まった時、お兄ちゃんはタイミング悪く進学する高校が決まっっていて、いい機会だからとそのままお兄ちゃんだけ残ることになって…

それから一度もお兄ちゃんの暮らしぶりを見たことがなかったのだ、休みがちようどできたこのチャンスを生かして、会いに来たというわけ。で、今は再会も終わって、その帰り。

「いきなり女の人がお兄ちゃんの家に来るんだもんなあ」

とにかく妹としてみたら何が気になるかって、女の人が存在が特に気になるわけで。

「そんな人はいないよ」

なんてはぐらかしていたくせに、すっかり来られちゃって。私が出ようとした時のお兄ちゃんの顔といたら、冬だというのに今にも汗を噴き出しそうなものになるんだもん。その表情の分かりやすさが変わっていなくてほっとしたけどね。

そして今日、新幹線に乗り込む私を、お兄ちゃんはその女の人と一緒に見送りに来てくれた。

遠くなっていく2人の姿を見て、凄く似合っていると思った。ただ、お兄ちゃんはその女の人のお気持ちを理解してないみたいで…あれは、私が端から見ていても分かるのに。なんで気付かないんだろう。

でも、お兄ちゃんも意識していないってわけじゃなさそうだし……
だってそもそもその女の人が家に来た時、ドア越しなのに誰なのか
分かったあたりが怪しくて仕方ない。

「あつ、もしかして」

一応、お兄ちゃんにばれないようにその女の人にはエールは送っ
ておいたけど……

「もしもーし？」

いつ通じ合えるのか、分かんないよね……お兄ちゃんの気持ちごと
うなっているのかわかんないし。

「人を無視すんなあ！」

「ひゃああつ！」

耳元で大きな声を出されたので跳ね返りの耳鳴りがこえました。
さつきから何か呼びかける声が聞こえるとは思っていたけれど……

「まったく……ようやく気付いたのか」

まさか、その相手が私だったなんて。

「え……ええっ？なんでこの電車に乗ってるの？」

そこにいたのは、私のクラスメイトの男子。というより、幼なじ
みと言った方が早いのかも知れない。

いくらそれほどの関係とはいえ、さすがに地元から新幹線で移動
しなければならぬ距離にいたりされると、驚く以外にない。

「偶然だ」

そんな一言で片付けられるわけがない。

「もしかして、ストーカー？」

「そんなわけあるか。むしろどっちがだ」

「何が言いたいのかな？」

「別に何も」

そんな言い方されれば、誰だって「別に何も」と思うわけないじ
やない。

「さて、隣に座らせていただきますよつと」

「ストーカーさんを隣に置いておけるほど私の頭はおかしくなっ

ないはずだけどなあ」

「今日は例外だと頭にたたきこんでおいてくれ」

「シーズンから考えて混んでいないと思って自由席を選んだのは、本当に誰か乗っているのかなってくらいに空いていたので間違っていないかったと言える。だけどその代わり、誰であろうとこうして横に座られるのもまた問題はないって言える話になってしまいうわけで別に、嫌ってほどではないんだけど…」

「で、何をしてきたんだ。わざわざこんな遠くまで」

「何の前触れもなく、彼が切り込んでくる。いつものことだから仕方ないとは思っているけど、私のことをちよつとは考えてほしいとも思っただけどな。」

「お兄ちゃんに会ってきたんだよ。けっこうちちゃんとしてたから安心しちゃった」

「そうか、そりゃ良かった」

「幼なじみというくらいだから家も近く、家族での付き合いも多いので、彼も私のお兄ちゃんのことには知っている。だから、一応教えておいてもいいかなと思った。」

「もっと部屋も汚く散らかっているかなって思ってたけど意外にそうでもないんだよ」

「まあ、あの人はけっこまじめな感じがするからな」

「人付き合いもうまくいってるみたい」

「なるほどね…さっきの彼女みたいな女性を見る限り、確かにそうかもな」

「うんうん…ん？」

「危うく、今の言葉をそのまま流しそうになる。」

「何でそれを知ってるの？」

「えっ、何が…うっ」

「彼もそのことに気付いたみたいで、今更ながら口を押さえたりなんかしている。」

「女の人の話なんて私はしていない、でしょ？それに、今偶然会っ

たはずなのについさっきの出来事を知ってるって…」

「悪かった」

彼が何も抵抗することなく、あっさりと非を認めてきた。これまでのやりとりからすると、意外な風にも感じた。

「どういうこと？」

「女の子1人で行かせるのが心配だから、見守ってくれとそっちのご両親に言われたんだ。実は今までもそれなりに頼まれてたりしてそれはあまりにも突然の、なんだか怖ささえ感じる告白だった。

これまでも1人で出かけることはよくあったけれど、それにも、つまり…

「や、やっぱり、ストーカー…」

「なわけあるか。そっちの両親公認だぞ」

その言い分も間違っではないかもしれない。でもお父さんもお母さんも、何を考えているのとは思っけど…

「な、なんでそんなの引き受けちゃうの！すごく時間の無駄でしょ！」

「…ここまで明らかにしても、全然気付いてくれないんだな」

彼の声がこれまでと違う小さく低いトーンに変わる。

そこには、どこか暖かくも思える何かの思いを感じた。

…そっか、そういうことなんだ。

お兄ちゃんのこと、私が悪く言う資格なんて無かったんだ。

あんなにあからさまに気持ちが見えるのに、なぜ気付かないのかっていうこと…

私自身が今まさに、お兄ちゃんと同じ立場になっていたのに。

「う、うん…ごめん、今わかった」

思えば最近はお兄ちゃんのことばかりで、私は周りが見えていなかったのかもしれない。

すぐ近くに、私のことを見てくれていた人がいたというのに。

これは私がちゃんと彼に対してはじめをつけないといけないと思
った。だから、更に言葉を続けようと私が口を開こうとする…と。

「わかつてくれたか、ようやく」

それよりも彼の言葉が先に私に届いていた。

そのまま、彼は…私の心の準備もできていないままに、先の言葉
まで…

「幼なじみなんだから当然だってことだな」

「へっ？」

あまりにも自分の思ったこととかけ離れたことを言われると、こ
んな声が出るものなんだ。

どういうことなのか、一瞬わからなくなる。

今の流れ、どう考えてもハッピーエンドにつながるところだった
んじゃないの？

だけど、これが彼の精一杯の照れ隠しだったということを知るの
は、もう少し先の話。

期待させといてこれはないじゃない、と文句を言うのもその時の
話。

やっぱり、気持ちを通じ合わせるのって難しいんだな。

だからお兄ちゃんも頑張ってほしいと思える瞬間。

私は…そうだなあ、この先ゆっくりでもいい…少しずつでも。

気持ちを、おしえて。

T e a c h ・ 9 気持ちを、おしえて。 （後書き）

連載中の「イロハ。」の方からサイドストーリー。こういう連動が
好きだったりするのです。

Teach・10 バレンタインを、おしえて。

「はあ、どうしようかな」

明日はバレンタインデー。私の前には何も手をつけていない板チョコと、道具たちが並んでいる。

決してチョコ作りが苦手というわけではない。何が問題なのかって、どれくらい気合いを入れていくかということだ。

周りからはサバサバした性格だと言われる私。自分でも、女らしくないところがあると思ったりする。なにせ、男たちの中に入っている方がむしろ話が合ったりもするし…

だからこそ、チョコレートを作って渡すなんてギャップがどう映るのかと心配になる。あと、あまりにもあからさまに本気なものを作ると引かれるような気がしてしまう。

どうしようか…時計の長針が1周するぐらいに考え込んだあげく、考えても仕方ないととりあえずとりかかってみる。それはいいものの、迷いが出てしまったのか…

「なんだか、中途半端な出来になっちゃったな」

今更新しく作り直す気力もなくて、それを結局持つていくことになってしまった。

それが私が作った、たった1包みだけのチョコレート。

いざ当日になると、腰が引けてしまうものなんだな…

こんなもどかしい気持ちは、なかなか味わうことがない。

何を今になって女らしく振る舞おうとしているんだか…気持ち悪い。

こういうのはさっさと渡してしまうのが一番なんだよね。そう言い聞かせて、私はある男に声をかける。

「ねえ、ちよつといい？」

それが、私のターゲット。話していても何の違和感も無くて、と

にかく話題が合って…

いつの間にか、それは気になる存在になっていった。

まだ、それが世間で言う恋ってもののなかはまだ分からないんだけど…

でもそのままもやまして日々を過ごしていくよりも、まずはこうしてアクションを起こしてみるのが一番だと思ってこうして準備をしてきたんだ。

「お、どうした。今日はずいぶん様子が違うな」

「えっ、そう見える？」

「なんか気合いみたいなオーラが見えるけど」

「まさか。そんなことないって」

今は否定するしかない。でも気合いが入っていることを既に見破られていることに動揺している私がいる。

何気無しに言っているのかもしれないけど、彼の言うことはけっこう鋭くて困ることもしばしばある。なぜかって、今の自分でもよく分からない彼への気持ちを感じられたりなんかしたら、これからどう接していけばいいのかわからなくなりそうだし…

今日もできれば、悟られずにいきたい。でもこれから渡すものを考えれば、少しは気付いてほしいという気持ちもある。

いったい私はどうしたいんだか…

自分自身でも処理できない複雑な気分になったりして。

「そうだ、一つ渡したいものがあるんだっ たわ」

言い訳をする方が先に出てしまつてなかなか本題に入れない私をよそに、彼はそう言うとかバンの中から指輪程度のサイズの箱を取り出して私に差し出した。

「えっ、これ…何？」

「まあ、開けてみなつて」

もはや私の目的は完全に脇に置かれてしまった状況で、言われるがままに開けてみると…

「…えっと、これ、チョコレート？」

しかもかなり綺麗にまとまっている。ホワイトパウダーまで振りかけられていて、見た目にもおいしそうだと思えた。

「いわゆる逆チョコってやつだな。なんか突然流行った感じだし、どうせだから作ろうと思って。こういうの作るの好きなんだ。意外だろ」

本当に意外だった。初めて知ったことだった。

だけど、それはなおさら…

「う、うん、意外…」

自然と後ろに回した手に力がこもるを感じる。

同じくらいの箱に包まれた、中身がほぼ一緒の…でもおそらく出来なんて雲泥の差がついていると思うもの。

「ところでさつきから手を後ろに回してるけど何かあるのか」
気付かれてた。

「もしかしてチョコレートとか。はは、そんなことないか」
読まれてた。

その時には頭の中がよくわからなくなって…もうどうにでもなれと思っていたのかもしれない。

「そうよ、何か文句ある？」

なぜ怒りながら渡すことになってしまったんだろうと思いつつ、箱を乗せたままの手を前に差し出す。

「いや、文句なんか別にないけど」

「じゃあ受け取れば？言つとくけど出来は期待しないでよね」

自分自身でも余計なことを言っているような気がした。このままじゃ嫌われてしまいそう。

彼は何も言わずに箱を受け取り、包みを開ける。

中身は変わるわけも無い、自分でも中途半端な出来のチョコレート。

形も整ってなくて、特に何か飾りをあしらったわけでもなくて。その中身を見た彼は、何も言わない。

「だから期待しないでよと言ったでしょ。何とでも言いなさいよ」

「いや、なんかすごく考えて作ったのが伝わってくるかな」

「なっ…何よそれ」

「それともオレがそういう風に思いたいから、か？」

そう言いながら彼は一口、私の作ったチョコレートをはおぼる。

それはチョコレートの甘さにこめられた、恋の魔法。

「また作ってきてくれよな」

バレンタインを、おしえて。

Last Teach 春のおとずれを、おしえて。

ずっと後を追っていた。

ずっと一緒に、ずっと誰よりも同じ時間を過ごしていたはずだった。

だけど、それも今日で終わってしまう。

センパイが、高校を卒業してしまう…

「卒業、おめでとございます」

「ああ、ありがとう」

どこか落ち着かないように、センパイは私と目を合わせてくれない。

その理由を、私は知っている。

「これから…返事を聞きに行くんですよね」

「そうだな。緊張するけど…でも」

センパイはそこで一旦間を置いたかと思うと、私の頭の上に温かい感触をもたらす。

それは、センパイの大きな手。

今の私が、してもらって嬉しいこと…センパイもそれを知っているの、私をほめる時には必ずこうしてくれるようになっていた。だけど、今はその温かさが切なくも感じる。

「告白までこぎつけられたのは君のおかげだから」

「うまくいくといいですね」

「ああ、まあ、そうだな」

でもなぜか、うまくいくことを願うと反応が薄い。

聞きたびに、本当に私がしたことは正しかったのかと考えてしま

う。
私はセンパイの幸せを願っていたのに。自分の気持ちを押し殺してまで応援していたのに。

応援なんてしないでいい、とセンプイが言っていたことを思い出す。だから大きなお世話だったのかもしれないけど…

「じゃあ、行ってくるよ」

そう言つて、センプイは私に背を向ける。

その後ろ姿に、私は不安を感じた。

うまくいったとしても、センプイが変わってしまうなんてありえないとは思っている。そういう人だということは知っている。けど、そう言い聞かせてみても、やっぱり言いようの無い不安だけが膨らんでいく。

それでも、私は引き止めなかった。…違う、引き止めるような勇気がなかったのかもしれないと思った。

「はい、いい報告待ってます…」

そのセンプイの背中に、私の思っていることとは正反対の言葉をかけながら。

それから私はどうしていただろう。

このままにしておきたくない、けど何もできないという身動きの取れない感じ…

じつとしていることができなくて、とにかく何も考えずに歩き回っていたのだろう。気がついてみると、近所ではかなり大きめの公園にたどりついていてた。

真っ暗やみの中をぼつぼつと、この黒い世界に吸い込まれてしまいそうなほどに輝く光。それはまるで私の心の中を映しているよう。だからなのか、あまり怖さを感じることなく公園の中に入っていた。

そこで見つけた、ある人影。

「あれは…」

センプイが告白した相手がいる。

そしてその隣には、違う男性が…

「そんな…」

さつきから言葉が出てこない。出てきてもほんの一言、それもほとんど意味を成さないことばかり。

「なんで…」

目の前の光景は、実際には私が望んでいたことだったのかもしれない。ただどこか、信じられない。

ずっと遠くから見えていたので、その2人には気付かれていないみたいで…きっと草陰が私の存在を隠してくれているのだと思う。

見てはいけないものを見てしまったような気がして。

そしてセンプイと次会った時にどうすればいいのか、今から心配してしまつて。

とてもこの場にずっといることはできなさそうだった。

まさかそうして立ち去った直後、公園の出口でセンプイに会つてしまふことになるとは思ひもよらず。

「あつ、センプイ…こんばんは」

「ああ、こんばんは」

センプイはそれ以上何も言わない。言いたくないのかもしれないけど、私は黙っていることができずに直接聞いてしまつていた。

「ど、どうだつたんですか…？」

「今の僕が1人でいるってことで察してくれ。それにしても…」

センプイが公園の中の方に目を向けた。

「幸せそうな顔してて、よかった」

その時、全てを言われなくともよく分かった。

センプイは、さつき私が目の当たりにした光景を見ていたのだと。なんで…」

さつきまでのようなほんの一言の言葉が、また私の口から出る。

でも今度は、その後が続いて止められなかった。

「なんでそんなことされなきゃいけないの！だってせっかく告白したっていうのに！」

「い、いや、落ち着けって」

センプイが私を止めようとする。だけど、それを拒否している私がいる。

自分のため？センプイのため？それさえもわからないほど頭が混乱している。

「落ち着けない！私の方がずっとセンプイのこと好きなのに！」

私の目に、どんどん涙がたまっていくのがわかった。一緒に今まで押し殺していた感情がむき出しになっていく。

「告白されたのになんですぐに違う人のところにいけるの？おかしいよ…センプイの気持ちも全然知らないで！」

それはこれまでの我慢の裏返し。こんなことをセンプイに言うのはますます傷を広げることだってわかっていても。でも、言わずにいらなかった。

「わかったから、落ち着け」

センプイの手が、私の頭の上に。

「あ…」

私はその顔を見上げる形になって…そして、笑顔をくれる。

センプイはずるい。こうすると私が何もできないのを知っているのに。

「僕が、そう仕向けたんだ」

でも、センプイの話は私の考えていたこととは違っていて…

言い切ったセンプイのその顔は、どこかすがしく、それでいて影を落としているようにも見えた。

「もともと好きな人が別にいるということは知っていたから。できれば応援したいと思っていた。告白したのはフェイクのつもりだったんだ。だけどな」

私の頭の手の力が、少し強くなったような気がした。

「本当は好きだったのかもしれないって、今気付いたんだ。だから、彼女が悪いなんて考えないでくれ。全て僕のタイミングが悪かっただけの話」

「でも…」

私がそれでも否定しようとする、彼の言葉がさえぎる。

「ありがとう」

「え…」

「好きだっけ言ってくれて」

突然顔が痛いと思えるほどに熱くなってくる。

そっだ、勢い余って言ってしまったことを忘れていた。

でも、センパイがここまで言ってくれたこと。それを受けてる私も逃げることなんて今さらしない。

「そうですね、まだまだセンパイはモテモテです。その証拠に私がいるんですから」

言ってしまう、もう照れなんてすでになくて。

顔だけでおさまっていたのが、今度は体中が熱くなっていくのを感じていたけど…

その熱さも、春が近くなっていくのを感じさせる風が冷ましてくれていた。

もうすぐ春がやってくる。

私にとっても、センパイにとっても今までの関係と違った新しい季節。

いったい、これから私たちの関係はどうなるのだろうか？

それは誰にもわからない、私自身もわからない。

でもきっと、それはこれからちゃんとおしえてくれる。

そんなことを、センパイの顔を見ながら。風に揺れる木々を見ながら。春の予感を全身で受け止めながら…期待いっぱいと思う。

だから、私だけでなく全ての恋する女の子に。

春のおとずれを、おしえて。

L a s t T e a c h 春のおとずれを、おしえて。 （後書き）

おしえて。 C a s e : W i n t e r はこれで終了です。

L a s t T e a c h は冬の最後にふさわしく、春に向けてのメッセージで締めてみました。

特に最後のあたりは今までの T e a c h ・1 から T e a c h ・1 0 への思いも込めながら。

…自身に向けてのねぎらいもちよつとあつたかも。

ここまでお付き合い頂いた方、どうもありがとうございました。

お詫び：一時、イロハの方に間違えてこの話を投稿してしまいました…ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903f/>

おしえて。 ~ Case:Winter

2010年10月8日15時27分発行